

2. 審査会講評

令和5年度審査会講評

本年度は、4件の研究論文の提出をいただきました。部門別の内訳は、自然科学に関するもの2件、経営に関するもの1件、催事等実施報告に関するもの1件です。研究者の所属別では、大淀川学習館2件、宮崎科学技術館1件、宮崎市民プラザ1件となっています。

研究論文は、理事長以下5名で構成する審査会において、審査要領に定める5つの基準に基づき審査及び評価を行いました。5つの基準とは、①協会の設置目的達成が期待できるか、②研究内容が指定管理者の業務に有効に活用されることにより業務達成へ貢献できるか、③当該年度に研究する緊要度が高いか、④研究が計画どおり実施されているか、⑤論文の構成が適切であるか、というものです。この基準を踏まえた審査会の評価を以下に述べます。

まず、全体を通して、研究者は、施設の管理運営や事業等の現状を的確に把握し、そこに存在している課題を掘り下げています。そして、取り組むべきものをしっかりと整理した上で、改善の方向性を模索しています。

○その中で、研究者の熱い思いが伝わってくる論文があります。「植栽管理における伐採木および落ち葉の腐葉土利用について」「環境に配慮した飼育・展示方法の模索」は、当協会が取り組んでいるSDGsの観点から、現状の課題を分析し、複数年にかけ、業務改善や経費削減を目指し、実践に移し、その成果を来館者にアピールしようとする姿勢を高く評価します。

○また、館の特性や今後の事業展開を踏まえ、最新技術の導入を研究した「展示室におけるAR（拡張現実）技術の可能性の検証」は、他法人の協力を得ながら、ARの導入・実践・検証を行っています。コロナ禍を経験し、体験の重要性や学びを深める効果や時代のニーズを捉える力、そして、日頃から改革・改善に取り組む姿勢や意識の高さを十分に感じる研究です。

○さらに、次年度から形態の変わる制作型公演を行うにあたっての課題や疑問・問題点を洗い出し、次年度の業務に生かすことを目的とした「制作型公演の組み立てから運営方法について」は、喫緊の課題として、他館の状況を確認しながら、熱心に研究に取り組んでいます。

どの研究も、日常の業務に携わりながら、時間を調整し、研究活動を行い、論文としてまとめた研究者の努力に敬意を表します。

以上、研究事業に取り組んだ研究者の成果と併せ、その研究や研究者を支えていただいた職員の方々にも感謝いたします。来年度、更に多くの職員が様々な視点を持って、研究事業に挑戦することを期待しています。

経営部門

制作型公演を組み立てから運営方法について

宮崎市民プラザ 企画総務課 企画係長 島井 康代

この研究事業は、制作型公演を行う上での課題や疑問・問題点を洗い出し、他の文化施設の聞き取り調査を行い、次年度からの業務に生かすことを目的としています。

研究テーマは宮崎市民プラザの置かれている立場や今後の運営に直結するものであり、これまでの手法も残しながら、将来に向けた方向性を模索している点は、有益性が高いと評価します。

課題等を4つの項目で整理し、次年度からの実施事業にどう反映していくかについては、現状を踏まえた考察がなされています。

現在は個人の研究段階ですが、実現のためには、館職員全員が共有し、課題や今後の方向性について議論しながら推進体制を構築し、有機的に組織を運用していただきたいと思えます。

なお、宮崎市民プラザは、地域密着型の文化施設として果たすべき役割は大きいため、更に検討を続けながら、宮崎の土壤に合った制作型公演が多数生まれることを楽しみにしています。

自然科学部門

植栽管理における伐採木および落ち葉の腐葉土利用について

～持続可能な里山の楽校を目指して～

大淀川学習館 主幹兼業務係長 日高 謙次

本研究は、継続的に出続ける落ち葉の腐葉土化を図り、処分にかかる様々な経費の削減に繋げ、また、SDGsに資する取組を行うことで、来館者へのアピールとなることも意識した内容です。

予定していた、伐採木の腐葉土化については、時間がかかることから落ち葉のみの腐葉土化へ変更となりましたが、当初の目的を達成することができたと評価します。

また、腐葉土内で繁殖が確認された生物を、館内の飼育教室等の事業で活用することが可能となったことで、この取組が来館者のSDGs意識向上に結び付くような表示等についても、今後、工夫していただくようお願いします。

なお、館で作成した腐葉土は、当協会内の他館のプランターの土として利用する等、SDGsの取組を全職員や全来館者に示す良い機会になればと思います。

最後に、この研究は、落ち葉の回収に関し、委託清掃業者や、他職員の協力など、多くの人を巻き込み、情報共有や協力体制の構築に繋がったことは、今後の腐葉土化の継続に役立つものだと感じます。

自然科学部門

環境に配慮した飼育・展示方法の模索

大淀川学習館 主任技師 園田 恵子

本研究は、環境保護の視点を取り入れ、現在の飼育道具や飼育方法を見直し、廃棄物の量の削減や、職員の負担軽減など、来館者の目に触れない、運営を裏で支える取組に着眼したものです。

これは、館がSDGsに真剣に取り組んでいるアピールとなり、大変意義深いものです。

特に、チョウの飼育においては、幼虫のエサ替えや卵の回収、放蝶作業、植栽管理など多岐にわたり、通常の業務に時間を取られる中、環境保護の視点から問題点を洗い出し、改善に向けた実践と効果を検証した点は評価に値するものです。

また、昆虫のフンを活用した肥料づくりに取り組んでいますが、今回の研究事業では、別の職員も腐葉土づくりに取り組んでおり、職員同士の情報共有や協力体制を、今後、更に強化することで、展示での見える化や、来館者の啓発に繋げられるよう期待しています。

催事等実施報告部門

展示室におけるAR（拡張現実）技術の可能性の検証

宮崎科学技術館 業務課 課長補佐 安達 大輔

ARは、リアルな現実の空間に、様々な情報を付け加えて見せる技術で、近年急速に進化しています。記憶に残りやすく、物事にストーリーを付与でき、通常では味わえない、理想の体験を実現することが可能となるのが、強みであり特性です。

今回、他法人と協力し開発に取り組み、実際に企画展「名月展」において、来館者に体験していただき、検証に繋がった点は特に高く評価できます。

研究の目的である「ARを取り入れることで代替的に学びを深めるような効果が得られるのかを検証する」ために、今後、ARの様々な利用形態を研究する中で、来館者の反応やアンケートの実施など客観的な要素も加味し、検討や研究を続けていただきたいと思います。

なお、このARの活用は、宮崎科学技術館の展示物や空間を有効活用することができ、新しい可能性を示すものであり、その活用法については、当協会内の他館でも応用できるものです。

AR技術そのものが日々進歩しており、どのタイミングでどのツールをどの展示に導入していくか、他館職員も巻き込みながら協会全体で普及啓発を図り、来館者の感動へと繋がることを期待しています。

令和5年度研究事業報告書審査会

公益財団法人宮崎文化振興協会理事長

高島 弘行

専務理事兼宮崎科学技術館長

横山 伸子

事務局次長兼経営戦略課長

安藤 邦恵

宮崎科学技術館学習指導員

塩月 和徳

宮崎市生目の杜遊古館長

永井 淳生